

關於語言行動研究的一試論

羅 素 娟

中國科技大學通識教育中心講師

中文摘要

本稿針對語言理論中語言行動研究的核心意義和理論架構進行研究。

結果顯示：

1. 關於語言行動的研究本質，是從傳達的基本原意，進而擴展到訊息的相互傳達行為，再到事件概念的建立，最後發展為溝通能力的研究。
2. 人類的語言行動研究是將人、行動、認知、文化、社會等因素結合，進行研究的跨領域學問。
3. 語言行動研究不限於語言知識的研究，也包含了人與人之傳達行為的研究，人類的內心表現，社會的生活百態和文化精神等。

關鍵詞：語言行動，記號學，社會語言學，文化人類學

言語行動研究に関する一試論

羅 素 娟

中国科技大学通識教育中心講師

要 旨

本稿は、言語理論における言語行動研究の位置づけ及び言語行動研究の本質や輪郭の構築について考察を行ったものである。

結果としては、次のようなことが明らかになった。

1. 言語行動研究という学問の意味概念は伝達するというプロトタイプからメッセージのやりとり、事象概念の構築、意思疎通の能力へと発展している。
2. 人間の言語行動研究は人間、行動、認知、文化、社会などの要素を結び付けて研究する学問の研究領域である。
3. 言語行動研究は言語知識の研究に限らず、人間と人間との伝達行動に関する研究、人間の心の表現と社会生活の姿、文化の魂などに関する研究までも含まれている。

キーワード：言語行動、記号学、社会言語学、文化人類学

A Preliminary Discussion on the Study of Language-Behavior

Lo, Su-chuan

Lecturer, General Education Center, China University of Technology

Abstract

The study aims to investigate the role of the study of language-behavior in linguistic theories and its nuclear meanings as well as its theoretical framework.

The results show that:

1. The concept of language-behavior refers to the process from the conveyed prototypes, to the mutual interactions among messages, to the construction of the event concepts and finally to the development of communicative competence.
2. The study of human language-behavior is cross-domain research which integrates such factors as humans, actions, cognitions, cultures and societies etc.
3. The study of language-behavior is not limited to the research on linguistic knowledge. It also includes the investigation of the interpersonal communicative behaviors, humans' mental expressions, the variety of social life styles and cultural spirit etc.

Key words: language behavior, semiology, sociolinguistics, cultural anthropology

言語行動研究に関する一試論

羅 素 娟

中国科技大学通識教育中心講師

1. 問題提起

言語研究とは何と不思議な学問であろう。異なる視点から問題に切り込んでいくと、異なるカテゴリーの内容が現れるということが、その魅力の一つであろう。

「言語学」という言葉は 19 世紀になってから、本格的に科学的な学問の一つとして認められたのであるが、人間が言語研究の面白さを味わうようになったのは近代になってからのことではなく、はるか昔からずっと続いていたのである。旧約聖書創世記第 11 章「バベルの塔」には、「神様が言葉を作った」と記されている。ただし、近代以前は、言語の研究は神学、哲学の影響を受けていたので、曖昧模糊で、科学精神が欠けているという批判もあって重視されなかった。しかし、19 世紀以後、言語理論の発展につれて、構造言語学から、生成文法、社会言語学、認知言語学などへと発展している。21 世紀の今日、言語の研究においては、単なる言語自身に止まらず、人間の使用する言語の中に反映されている社会と人間と文化をつなぐ研究の重要性が再び脚光を浴びるようになっている。

近年の日本語教育の研究もそうである。教育視点が教師中心から学習者中心へ移り変わっていくことにつれ、研究対象も教室から接触場面へ移ってきている。そのため、実際の言語社会で行われる日本語の運用能力が重視されることにより、言語行動の研究への関心は、急激に広まっている。しかし、言語行動研究は「行動言語

学」¹という一つの学問領域として認められているが、その研究領域の輪郭と本質は学者によって異なり、一定の見方はまだ確立されていないようである。

したがって、本稿では、まず、言語理論における言語行動研究の位置づけ及び言語行動研究の本質について考察を行う。次に、言語行動研究の輪郭の構築を試みる。

2. 先行研究

言語行動研究については、学者により様々な説がある。主な説は次の通りである。

南（1979：5－18）は、言語行動研究の分野において、研究課題の特徴は、実際のコミュニケーションのいろいろな場合における具体的な言葉の使用問題と、言語体系と言語外の世界の関係をどう把握するかという二つのことに集約できると述べている。

林（1980：305－306）は、『国語学大辞典』で言語行動の研究内容を記述研究、社会言語学的研究、哲学的研究という三種類に大きく分けている。

杉戸（1992：29－44）は、言語行動への視点により言語行動研究は次の3種類に大別できると述べている。

- (1) 言語行動の種類や姿そのものへの視点
(言語行動の外側の姿への視点)
- (2) 言語行動の構成要素への視点
(言語行動の内側の姿への視点)
- (3) 具体的な言語行動の内的構造、動的構造への視点
(会話や談話の内的構造、動的構造への視点)

杉戸は、「言語行動の構成要素を観点とし、実際の言語行動を観察、記述、分析する多様な研究が言語行動研究の主力である」と指摘している。たとえば、時枝の

1 野元（1983）「言語行動学入門」を参照。

3 項目（主体、場面、素材）、永野の 5 項目（表現者、理解者、素材、環境、文脈）、南の 7 項目（言語社会、参加者、状況、言語的コミュニケーションの機能、コミュニケーションの内容、媒体、言語体系）、ヤコブソンの 6 項目（発信者、受信者、文脈、メッセージ、接触、言語体系）、ハイムズの 8 類 16 項目（状況＜場面、場＞、参加者＜話し手、発信者、聞き手、受信者＞、目的＜結果、目的＞、行為連鎖＜メッセージの形成、メッセージの内容＞、ことばの調子、手段道具＜媒体、言語形式＞、規範＜ことばのやり取り、解釈の規範＞ジャンル）などである。

ネウストブニー（1979：33－66）（2003：3－6）は、ハイムズのモデルについて、構成要素の数と類型が明瞭ではない、また、文法論の中の生成モデルと結び付けにくい、生成的なモデルではないといった欠点を取り上げ、さらに、社会言語学、社会心理学の視点を取り入れて、ハイムズのモデルを再度整理し、「言語行動は次のような五つの段階の組み合わせから出来ているプロセスである」と主張している。

- (1) コミュニケーションのためのセットを選ぶこと。
- (2) コミュニケーションの要素を場面から取り出すこと。
- (3) 要素を並べること。
- (4) 並べた要素を表層に移すこと。
- (5) 以上の生成過程に問題があったら、それを管理（調整）すること。

野元（1983：9）は、「「言語行動学」は一般には社会集団または言語社会の成立に共通の言語行動を調査してそれによって言語行動の類型を記述する。同一言語を扱うことが前提となっている研究もあるし、国際化時代における異文化間のコミュニケーションを扱う研究もある」と指摘している。

渋谷（2003：242）は、従来の言語行動研究を、その取り上げた単位あるいは対象の大きさにより、二つの類型に分類している。

- (1) 言語行動を最大でも一つの発話（文）に限定して分析するもの。
- (2) 言語行動を、対話者間の相互作用、あるいは発話の連鎖として捉え、その

時間軸に沿って展開する状況を把握しようとするもの。

真田（2006：46）は、これまでの言語行動研究は（1）表現形式への視点（2）インターアクションへの視点（3）異文化への視点という 3 つの視点から行われてきたと述べている。

以上の研究を概観すると、言語行動の研究課題は幅広くて、言語体系自体の研究だけではないと言える。対人行動としてのコミュニケーション問題も含まれている。そして、一つの発話文を研究単位とするものもあれば、一連の発話を研究単位とするものもあるということが分かる。広義的に言えば、言語行動の研究は静的な言語研究であるにもかかわらず、動的な言語研究も含まれている²。たとえば、構造言語学、生成文法、語用論的なルールなどを扱うものは前者に属している。実際の発話行為により、意味づけを考えてコミュニケーションを行うという活動の過程として現れるものは後者である。それゆえ、言語行動研究は全体的言語体系の研究とも言える。しかし、このようにまとめると、定義が大きすぎて、把握しにくくなる。したがって、以下、言語行動研究の核心とはいったい何かについて、考察してみたい。

3. 言語行動とは何か

まず、言語行動とはいったい何を指すのかについて、その定義を考えてみよう。辞書には次のように出ている。

「言語という記号体系を使って、表現や伝達を行うこと。また、言語表現に接

2 橋本（1998）の「動的言語観と静的言語観」を参考した概念である。静的言語観とは、時間的に変化したり具体的な使用の状況で揺らいだりしない構造こそが言語の本質と考える視点である。これに対して、動的言語観とは、言語を、主体が話し、聞き、読み、書くという創造的活動の過程として現れるものとして見る立場である。

して、これを受容し、理解、反応などを生ずること。」（『国語学大辞典』1980：350, 東京堂）

「言語記号により思想、意図、感情などを表出したり了解したりする社会慣習的な人間の伝達行動。話す、聞く、書く、読むの四つに大別される。」（『大辞林』1988：784,三省堂）

「人が言語によって行う思考、表現、伝達及びこれに対応する理解、受容、反応などの行動の総称である。」（『新版日本語教育事典』2005：479, 大修館）

以上をまとめれば、「言語行動」というのは、言語によって人が行う行為である。そして、その行為は単なる言葉の記述だけではなく、出来事や過程として動的な姿として捉えられるものである。

では、具体的に言語行動というのはいったいどんな内容を指すのであり、どういう行動であろうか。一般的に、言語行動は言語の有無により、言語行動（言語による行動）と非言語行動（身振り、表現、視覚記号などといったものによる行動）に分けられる。前者のみの場合を狭義的定義、前者と後者を合わせたものを広義的定義と呼んでいる。広義的な定義は多くの学者に支持されている。たとえば、国広（1977）、南（1979）、野元（1983）である。

ただし、ここには、興味深いことがある。つまり、この三人は、同じく言語行動を広義的に扱っているが、それぞれ「伝達行動」「コミュニケーション」「言語行動」という三つの似た用語を用いて言語行動の定義を説明している。

「…そこで伝達という観点から眺めると、言語行動だけではなく、非言語行動も重要な働きをしていることに気付く。…本稿では、言語行動と非言語行動

を合わせて「伝達行動」と呼ぶことにする。」（国広 1977 : 4）

「人間が言葉を使って何らかのコミュニケーションを行う行動…このように人間の行うコミュニケーションには、言語的な手段によるものもあれば、言語以外の手段によるものもある。それらは多くの場合たがいに協力して全体的なコミュニケーションの形を作っていると考えている。」（南 1979 : 4-10）

「「言語行動」は極めて具体的な場面と結びつく。この具体的な場面において、ある言語形式、あるいは、言語記号が選択され使用されて、それによって起こる伝達行動である。…「非言語行動」は「言語行動」との対比によって、意味を持つものであり、これを含めて合わせて「言語行動」とするべきだ。」（野元 1983 : 4）

この三つの用語は言語の機能の視点から広義的に言語行動を考えたもので、この三つの用語を区別するのは難しい。そのせいか、実際、「コミュニケーション」と「言語行動」と「伝達行動」を同じように扱っている研究者もいる³。

4. 言語理論における言語行動研究の位置づけ

言語行動に似た用語としては、「言語技能」「言語運用」「言語活動」「言語生

3 『言語学大辞典第 6 巻術語編』によれば、「人の行う表現、伝達の行動は一般にコミュニケーション行動（communication behavior）とよばれ、…」とある。また、ネウストプニー（2003 : 2）は「言語行動は「コミュニケーション」とほぼ同じ使い方が出来る」と指摘している。

活」「言語行為」などという用語も取り上げられる⁴。これらの用語はそれぞれその歴史と理論背景を持ち、いままで様々な学者によって広く議論されている。しかし、その意味は視点によって異なり、一定の共通理解はまだ確立されていないようである。したがって、用語の意味を区別することよりも、歴史の流れの中から、言語行動研究の本質は何か、どんな研究分野に関わっているのか、どのような研究方向に進めていけばいいのかということに焦点を置いたほうが有意義だと思う。

まず、野元（1983, 1985）前田（1983）渋谷（2003）ネウストプニー（2003）真田（1992）杉戸（1992）の説に基づき、これらの用語を言語研究の視点、研究分野などにより、言語行動の内容を分類してみる。

表 1 言語行動の研究

	視 点	研究分野	代表的研究者と学説
「言語活動」 「伝達活動」 「言語行為」	言語観	言語学の記述研究 日本の社会言語学 的研究 欧米の社会言語学	* ソシュール （ランゲージ language） * 時枝誠記（言語過程説） * オースティン（発話行為）（語用論）
「言語生活」	国立国語研究所の調査活動	日本の社会言語学 的研究 文化人類学	* 時枝誠記（言語過程説） * 菊沢季生（位相論）
「言語技能」 「言語運用」 「コミュニケーション能力」	日本語能力	社会言語学 文化人類学 心理言語学 異文化間コミュニケーション学 日本語教育の研究	* 野元菊雄（言語行動学） * 「サピア・ウォーフの仮説」 * ハイムズ（SPEAKING モデル） * ネウストプニー（社会文化行動と社会言語行動と文法行動）

歴史的に見れば、最初の言語行動研究は言語の定義に起源する記述研究である。スイスの言語学者ソシュールは、その弟子たちによって、再生された講義録“Cours

4 野元（1983）前田（1983）を参照。

de linguistique générale”(小林英夫訳『言語学原論』昭3、改訳『一般言語学講義』昭47)で、人間の言語行動(ランゲージュ language)はパロール(parole)とラング(lange)によって成り立つとしている。「言語行動」の全体を「ランゲージュ」とし、その活動の際に用いられる社会的習慣の体系を「ラング」、その体系を個人が用いて実際に表現した発話を「パロール」として区別した。⁵

時枝はこのような理論の影響を受け、『国語学原論』(1955)で、言語は、伝達の過程つまり表現と理解の過程そのものであるという「言語過程説」を提唱し、同書のp.13では、「言語＝言語行為＝言語活動＝言語生活」という等式を示した。また、同書では、「言語と思想の伝達」「言語と生活」「言語と社会」などの節を設け、時枝は言語と人間の思想と生活と社会との関係を述べている。誰か(主体)が、誰か(場面)に、何物か(素材)について語ることによって成立するとして、主体、場面、素材を言語行動の条件とした。

しかし、時枝(1955)は「ランゲージュ」ではなく、むしろ、ソシュールの「パロール」説に近い「言語は常に必ず個人の行為としてのみ成立することを意味する」と主張している。この点では、スキナー(1957)⁶の主張に類似している⁷。時枝のこうした考えは日本の社会言語学的研究に大きく影響を与えている。その後、日本の社会言語学的研究は、「言語生活」という概念のもとに、1948年に設立され

5 『日本語文法大辞典』(2001:240)を参照。

6 佐藤(1973)では、「スキナーの言語観は、言語行動(発話)をある言語共同体の成員が、他の成員によって強化されることにより条件付けられオペラント行動とみなすものである」と言う。この点について、佐藤氏は同論文で「言語行動は、二人以上の人間が関与する社会的な場面における社会的な行動連鎖ともいふべき一種の行動連鎖の重要な一部を成している」と説明している。

7 佐藤(2005:4)は「言語行動(verbal behavior)は個人の行動の一種であり、言語(language)は言語共同体が共有する言語行動から抽象された構造的体系である。人々は言語を使用するのではなく、言語行動を自発するのであるとスキナーが指摘している」と述べている。

た国立国語研究所の活動による実際の調査研究から始まった。⁸したがって、時間の観点から見ると、日本の社会言語学的研究は欧米に先んじていると言っても差し支えない⁹。しかし、1970年代以後、日本の社会言語学的研究は欧米の社会言語学（sociolinguistics）のインパクトを受け、欧米の社会言語学の理論や視点を取り入れて、より盛んに研究されるようになった。そして、ついに、理論的な面も、実証的な面も持つ今の「社会言語学」に至った。

では、欧米の社会言語学とはいったいどんな学問であろうか。これについては、その名が示すように、社会構造と言語構造との関係を明らかにする学問であるが、それが登場した背景の一つとしては、チョムスキーの生成文法への反発ということが考えられる。ところが、社会言語学の言語観を探究すると、社会言語学とソシュールの言語観は深い関わりがあるということに気付く。

ソシュールの言語観では、事物や概念は言葉に先立ってあるとは考えない。言葉こそが世界に切れ目を入れて名前をつけることで、概念が存在するようになるのだと考える。¹⁰つまり、言葉の意味はその言葉の言語社会で認知される概念と密接に結びついているということが分かる。また、その概念には、「言内の意味」と「言外の意味」が含まれている。「言外の意味」の多くは日常世界での経験に基づいて、推論されてきたものであるので、社会的、文化的な意味づけがよく見られる。

一方、文化¹¹を記号とすれば、記号とその意味の関係は文化によって異なる。サ

8 真田（1992：11）から引用。

9 真田（1992：10）を参照。

10 『一般言語学講義』によれば、「言語とは概念を表現する記号の体系であり、・・・そこで社会生活の中での記号の一生を研究する学問を考えることが出来る。・・・それを「記号学」と名づけることができよう。」と言っている。

11 石川栄吉（1987：666）から引用。『文化人類学事典』に従い、文化を「特定の社会の人々によって習得され、共有され（後世に）伝達される行動様式ないし、生活様式の体系」と定義している。

ピア・ウォーフの仮説¹²はこのような考えを主張したものである。

または、言語は人の発話行為により、動的な意味を表すのであるというわけで、オースティン（1962）は『How to Do Things with Words』で「言うことが行うことである」という観点に基づき、意味行為を発話行為の構成要素として位置づけ、「言語行為（speech act）」という説を提出している。「言語行為」は次の三つの「行為」から重層的に成立している。① 発話行為¹³（locutionary act）、② 発話内行為¹⁴（illocutionary）、③ 発話媒介行為¹⁵（perlocutionary）。

その後、「言語行為（speech act）」という説は語用論や談話論へと発展している。

他方では、アメリカの文化人類学者 ハイムズ（1974：163）は、言語学の研究に対して、「言語と社会生活の本当の繋ぎである発話がほとんど無視されてきた」ということを指摘し、同書の序文で、社会言語学を再構築する方向を示し、ある地域社会における伝達行為についての研究を社会言語学の一分野として確立した。また、社会言語学の応用として、二言語教育の研究は、言葉と社会の関係に止まらず、言葉の変異の研究を、言語使用の適切性（appropriateness）と社会生活の相互作用の条件として考慮して、広く伝達能力（communicative competence）の解明を目指し、「スピーチイベント」（speech event）を伝達行動の単位としている。このような考え方はその後の外国語教授法のコミュニカティブ・アプローチ（communicative

12 ここではサピア・ウォーフの仮説の弱い解釈に従う。つまり、言語がそれぞれ独自の語彙構造、文法構造を持ち、よってその言語を使用する者はその言語に特有の語彙、概念に基づいた視点で世界を分類して理解するため、言語が話者の思考様式（や文化）に影響を及ぼすということを示している。

13 「発話行為」とは文法構成及び意味を持った文を発する行為それ自体である。

14 「発話内行為」とは、前記の発話行為を遂行することにおいて、それと同時に遂行されるもう一つ別の行為、即ち約束したり、陳謝したり、警告したり等々の行為である。

15 「発話媒介行為」とは、この発話行為、すなわちまた発話内行為を遂行することによって結果として生ずるという仕方で遂行される、相手を喜ばせしたり、説得したり、脅かしたり等々の行為である。

Approach)¹⁶や異文化コミュニケーションの研究¹⁷に大きく影響を与えている。

その後、言語能力を見直すことで、言語能力には単なる語学能力だけではなく、伝達能力に役立つ社会言語能力、談話能力、方略能力、語用論的能力なども含まれるという主張が次々と提出されている。（Canale & Swain 1980 ; Van Ek 1986 ; Canale 1983 ; Bachman 1990）¹⁸

その中のニューストプニーは、ハイムズの影響を受けて、『新しい日本語教育のために』（1995 : 47）で、「すべてのコミュニケーション行動は実質行動から出発する」と指摘し、言語行動の視点から、言語能力を新しく定義した。言語行動を非言語的行動（社会文化行動）と言語行動（コミュニケーション）に分け、また、言語行動（コミュニケーション）を文法外コミュニケーション行動（「社会言語行動」）と文法行動（狭い意味の「言語」）に分けている（2003 : 2）。

以上、述べたように言語行動研究に関する言語理論において、「言語行動学」という学問の意味概念の軌跡を辿ると、言語行動研究の意味概念は伝達するというプロトタイプからメッセージのやりとり、事象概念の構築、意思疎通の能力へと発展しているということが分かる。

5. 言語行動研究の伝達モデル

伝達することが言語行動研究の中核とすれば、伝達とは何であろうか。ここでは、まず、前述の考察から、時枝の「言語過程説」とソシュールの「記号学」に基づき、

16 1970 年代以後、ヨーロッパ理事会が欧州の統合に伴う構成各国の国民の外国語能力向上をめざしてウィスキングズ（DA. Wikins）らの協力を得て開発した新しい教授法である。

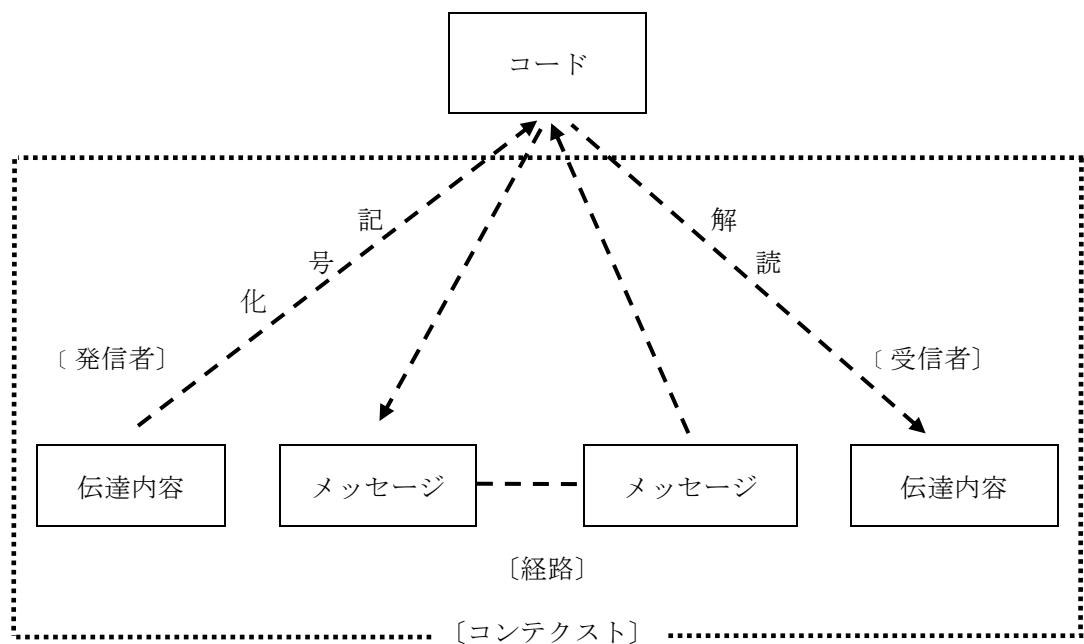
17 石井（2001 : 10）によれば、「異文化コミュニケーションの体系的な研究は第二次大戦直後にアメリカ連邦政府による戦後の対外政策の一環として始められた」という。

18 中田達也の「英語教育・外国語教育・第二言語習得に関する専門用語データベース」を参照。（<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~t-nakata/terms.htm>）、2008 を参照。

池上（1984：38）（1994：55）の伝達の仕組みとシュラムのモデル（Schramm 1954）¹⁹を参考し、言語行動研究の伝達モデルについて論述してみよう。

まず、池上（1984：38）（1994：55）の伝達の仕組み、シュラムのモデル（Schramm 1954）について、説明する。

図 1：伝達の仕組み



上の図²⁰では、「言葉による伝達が行われる場合、まず、伝達をする「発信者」（話し手）（sender）と伝達を受ける「受信者」（聞き手）（receiver）がいる。伝

19 飯野（2003：92）から引用。

20 この図はもともとヤコブソン（1960）が作成したものである。ハイムズ（1962）は「コンテキスト」を「話題内容」と「場面」に分けて、修正している。だが、本稿では、この二人の図をまとめて修正してみた。それは、ヤコブソンのいわゆる「伝達内容」は、ハイムズの「話題内容」に当たっているし、「コンテキスト」の意味については、場面だけでは説明できないところがある。以上の二つの理由から、本稿ではやはり「コンテキスト」という用語を用いる。

達するためには、「コード」²¹ (code) により、表現しなければならない。即ち、「発信者」が「コード」及び必要ならば「場面 (situation)」を参照しながら、「伝達内容 (topic)」の記号による表現として、メッセージ (message) を作成する。(以上はいわゆる「符号化 (encoding)」の過程である。) そして、そのメッセージが何らかの「経路」 (channel)²² を通って、「受信者」に達する。「受信者」は受け取ったメッセージをコードを参照しながら、「解読」 (decoding) して、伝達内容を再構成する。(これがいわゆる「解読」の過程である。) 伝達が理想的に行われた場合は、「符号化」と「解読」は方向性においてのみ異なる同一の過程であり、「発信者」が「メッセージ」に構成した「伝達内容」と受信者が「メッセージ」を解読して再構成した「伝達内容」とは一致するはずである。しかし、届いたメッセージは「コード」を逸脱している場合もよくある。その時は「コード」を参照するだけでは解読できない。それを補うためには、受信者は、「コンテキスト」 (context)²³ を参照して、「解釈」をしなければならない。したがって、受信者の参照すべきものとしての「コード」と「コンテキスト」とは、いわば相補的な関係にあると言える。「コード」への依存が減れば減るだけ、コンテキストへの依存度が高まる。(池上 1984 : 37-64, 川本 1982 : 7-10)。

実は、いままで、言語行動の構成要素を観点とする学説²⁴及び従来のコミュニケーション論²⁵は、殆ど図 1 に基づいて発展してきたものである。しかし、前述したように、言語行動研究という学問の意味概念は、伝達するというプロトタイプから、メッセージのやりとり、事象概念の構築、意思疎通の能力へと発展しているので、

21 「コード」とは言語体系を指す。その中に、記号表現と記号内容が含まれる。

22 「経路」とは媒体を指す。たとえば、手紙とか、郵便、電報、テレックス、視覚、聴覚などである。

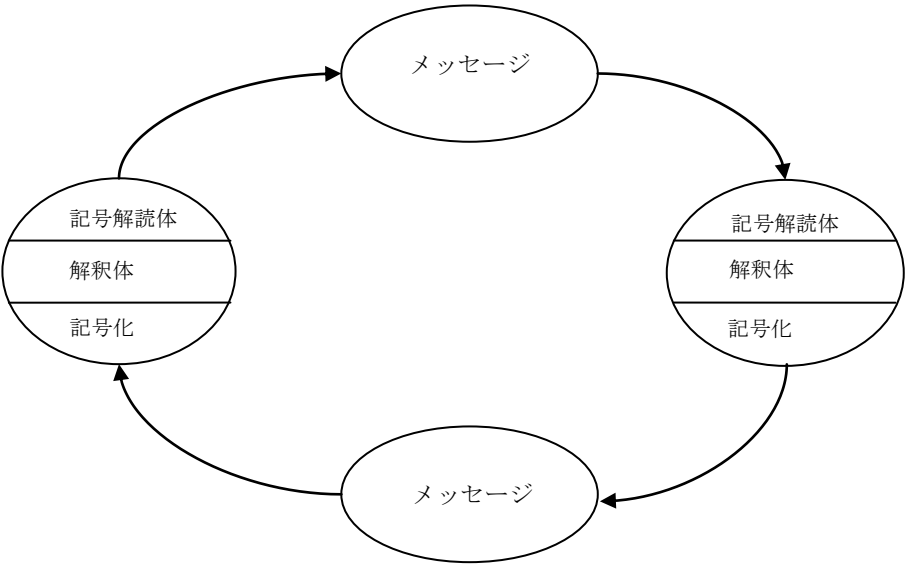
23 「コンテキスト」とは文脈の事を指す。ハイムズの言う「場面」のことも含んでいる。

24 本稿 2 ページの杉戸の説を参照。

25 同注 20。

図 1 だけでは、スピーチイベント（speech event）」としての言語行動を完全に説明できないことがある。それゆえ、次の図 2 を紹介したい。

図 2：シュラム(1954)のモデル²⁶



出典：Schramm, W., ed., *The Process and Effects of Mass Communication*,
Urbana, IL.: University of Illinois Press, 1954, p.30.

メッセージの発信者はまず伝達内容を記号化して、受信者へ送る。受信者はそのメッセージを解読、解釈して、なんらかのフィードバックを送り手に返す。こうしたメッセージのやりとりは相互的であり、双方向性がある。ここでは、円環的な視点をとっているが、このような円環的伝達モデルは理想的な伝達方式に限られる。現実には人間のコミュニケーションは単一方向の循環ではないので、発信者と受信者の役割は固定されず、状況に応じて変動するのである。（飯野 2003：92）

筆者は、言語行動の伝達過程モデルは図 1、2 の総合体であると考えている。この伝

26 石井（2001：29）から引用。

達の過程²⁷には、伝える行動と読み取る行動が含まれる。前者は符号化の過程であり、後者は意味づけの過程である。その中に、後者は、「コード依存－解読－発信者中心」と「コンテキスト依存－解釈－受信者中心」の二種類の型に分けられる。²⁸ しかも、この二種類の伝達の型は、言語社会の制約と言語使用者の認知行為により、発信者と受信者の役割は固定されず、状況に応じて、動的な組み合わせを取り、さらに、「スピーチイベント (speech event)」という言語行動が構成される。言語社会の制約というのは、社会集団の社会ルール、階層、場面などを指す。認知行為というのは、諸事象について人間が理解したり、感じたりする心理過程である。シンボリック作用理論 (symbolic interactionism) の視点²⁹から見れば、人間の言語行動を支配する要素には、社会的な制約によるもの以外、その言語使用者である人間の認知や思想によるものもある。それは、人間の認知行動は自分自身の具体的経験を基盤とする認知のインターフェイスを介して言葉の意味を理解しているからである。

つまり、人間がメッセージを伝達する過程においては、受信者は自分自身の経験や知識の参照点に基づき、相手の発話について推論を行ったり、返答したりして、一つの「スピーチイベント (speech event)」の結果に達するのである。そして、いくつかの「スピーチイベント (speech event)」の組み合わせにより、コミュニケーションに到達するのである。

この点では、オースティンの「言語行為」とは少し異なっている。本稿では、オースティンと同じように「発話行為」を出発点として人間の言語行動を捉えているが、オースティンは「言語行為」の発話行為は①発話行為 (locutionary act)、②発

27 時枝は「言語は伝達の過程つまり表現と理解の過程そのものである」と提唱する。

28 池上 (1984 : 38－50) を参照。

29 石井 (2001 : 101) はシンボリック相互作用理論の理論的な前提を七つ取り上げた。その中の一つとして、「人間は経験したことに意味を与えることで物事を理解するが、その媒介となるのは記号、即ち、シンボルである」と述べている。

話内行為（illocutionary）、③発話媒介行為（perlocutionary）という三つの「行為」により重層的に成立すると主張している。また、「事実確認的発言」という陳述行為も「発話内行為」の一つとしている。しかし、実際の会話行動では、オースティンの「事実確認的発言」と「行為遂行の発言」を厳密に区別することは不可能である³⁰。それは、伝達するという言語行動は単純な意味づけの行為というよりも、複合的な意味づけの行為だと言えるからである。

したがって、本稿では、ヤコブソンの図 1 の主張に従い、発話の視点だけではなく、言語行動モデルは、両者の視点から解釈しなければならないと筆者は考える。発信者の意図と受信者の解釈は、伝達行為が成立するかどうかを決める鍵となるからである。

また、一方、意味が伝達される過程においては、一回のやりとりでコミュニケーションの目的が達成されるわけではない。人間の伝達行動は言語行動だけではなく、身振りや表情などの非言語行動も同時に意味付けをすることがある。というわけで、直接的な言語行動と間接的な言語行動も無視してはいけない。

以上述べた言語行動の伝達モデルは、同じ言葉を使用する集団社会いわゆる「言葉の共同体」の人々によって行われる言語行動の伝達行動を指す。しかしながら、モデルと言っても、モデルはやはりモデルで、あくまでも仮説演繹的なものである。モデルは言語を一般化したものであるが、変数が存在する。たとえば、「言葉の共同体」の人々は会話活動とその解釈のための規則を共有しているので、理解し合える可能性が高いと思われる。しかし、現実には、実際の言語行動の伝達活動では、同じ言語コードが使われても、言語変異の問題や発信者の解読と受信者の解釈の一致あるいは不一致という問題により、言語行動の達成は影響を受けるのである。このような問題点は、言語行動に関する研究だけではなく、言語能力育成に対する言

30 尾関周二（1983：101）から引用。

語教育の注意点としても重視すべきことだと思う。

6. 言語行動研究の輪郭

前述の考察に基づき、本稿の結論として言語行動研究の輪郭を次のように彫り出してみる。

- (1) 言語行動の目的は、メッセージを伝達することである。
- (2) 言語行動の伝達行動は発話行為から始まり、お互いの対話行為により「スピーチイベント (speech event)」に達する。
- (3) 言語行動は最初は個人的な行動として認められる。そして、人間は日常の暮らしから学んできた経験、知識により、言語行動を行う。言語行動には、人間の意図を伝達するものだけではなく、言語使用者の思想、感情の表現を示すものもある。その目的は、人間社会において人々はメッセージを伝えあうことにより、意思疎通の目的を目指すのであることにある。それゆえ、言語行動による表現は、社会、文化、人間の認知などの要素とは切っても切れない関係を持っている。そして、それらの要素はお互いに結びつきあるいは重なり合うという関係を持っている。したがって、言語行動の表現は集団で社会生活をしている人間の感情、認知、文化の特徴を表す表現であるとも言える。
- (4) 言語行動研究の研究史をもう一度辿ってみると、伝達行動と言語行動とコミュニケーションとを同じように扱う人が多いが、辞書の意味及び研究理論の発展から、言語行動研究という学問の意味概念の軌跡を見ると、伝達するというプロトタイプからメッセージのやりとり、事象概念の構築、意思疎通の能力と発展しているという軌跡が描かれる。それゆえ、伝達行動と言語行動とコミュニケーションという三つの用語にはやはり若干の相違

があること。むしろ、包摂関係をなっていることが分かる。この三者の中で、コミュニケーションが一番幅が広い。そして、伝達機能は三者の核心的な共通点である。

- (5) 言語行動は本質的に対人行動であるところから、必然的に社会的な性格を持っている。そのため、言語行動は社会言語学の下位分類の一つとして認められる（真田 1992 : 15）³¹。しかし、社会言語学の研究内容はほとんど言語行動の研究内容に属すると主張する学者（林四郎）³²もいる。後者の意味する社会言語学は、主に、ミクロ社会言語学³³のことを指す。つまり、話し手と聞き手の二人から構成されるミクロの社会において言葉がどのように使用されるのか、場面によって言語変種がどのように出現し、どのように機能するか、さらに、二言語使用の研究の応用として、地域、社会全体の二言語あるいは、二方言使用（ある言語からもう一つの言語への切り替えの実態とその要因の解明）などのミクロ社会言語学の研究課題はすべて言語行動の問題とされる。ところが、社会言語学は、言語と社会が関わるすべての問題を扱うものであるが、言語行動には、言語と社会のことに限らず、言語と人間の認知（とくに感情の認知）、言語と文化との関わりなどの問題も含まれている。単なる社会言語学で、言語行動の領域を完全に包含することが出来るかどうか、問題となる。

- (6) 言語行動は人間の行動から出発し、人間の行動は人間の認知を通じて行われ、人間の認知は歴史、文化、民族、価値観などに深く関わっている。ま

31 真田（1992）は「社会言語学」における研究部門とその細目を九つの領域に分類している。言語行動はその三つ目の領域である。

32 『国語学大辞典』（1980 : 306）から引用。

33 ミクロとマクロ社会言語学は同じく言語の変異を問題にするが、前者は場面に応じて個人が使い分ける変種、後者は言語使用者の年齢、教育、社会階層、職業、民族別に見られる変種、あるいは、言語接触や言語政策の問題を扱う。『大修館英語学事典』（1983 : 120）から引用。

た、文化は人間社会の産物として存在していて、社会は人間の集団である。よって、以上に述べたすべての要素を含んで、一貫した関係を構築することが出来るものは、人間という要素であると言える。したがって、本稿では、人間の言語行動研究を「人間、行動、認知、文化、社会などの要素を結び付けて研究する学問の研究領域である」と定義づけたい。言い換えれば、言語行動研究は社会言語学、文化人類学、心理言語学、コミュニケーション論などの領域に跨る学際的な学問である。言語行動研究は言語知識の研究に限らず、人間と人間との伝達行動に関する研究、人間の心の表現と社会生活の姿、文化の魂などに関する研究までも含まれていると筆者は考えている。具体的に言えば、言語行動研究とは、言葉の変化や選択をなんらかの社会的要因から説明しようとする「社会言語学」、文化的、民俗的な背景から言語行動を分析しようとする「文化人類学」、言葉と人間の内的過程との関連に触れた「心理言語学」、記号学の色彩の濃い「コミュニケーション論」といった学問の統合体である。

7. 今後の研究課題

前述したことは同一の「言葉の共同体」の場合を指す。なお、言語行動研究の応用としては、二言語使用についての応用が最も注目されている。とりわけ、異なる二言語間における言語行動の場合である。しかも、同一の「言葉の共同体」の場合と比べて、二言語使用の場合は極めて複雑である。したがって、それは、次の研究課題としたい。

参考文献

- 陳其南校正、張恭啓、于嘉雲譯。《文化人類学》、R. Keesing 著, “Cultural Anthropology—A Contemporary Perspective—”, 台北：巨流圖書公司、2004。
- 池上嘉彦『記号論への招待』、東京：岩波書店、1984。
- 池上嘉彦、田中桂一、唐須教光『文化記号論—ことばのコードと文化のコード』、東京：講談社学術文庫、1994。
- 石井敏、久米昭元、遠山淳編著『異文化コミュニケーションの理論』、東京：有斐閣、2001。
- 石川栄吉『文化人類学事典』、東京：弘文堂、1987。
- オースティン, J. L. 著 坂本百大訳『言語と行為 (How to do things with words) 』、東京：大修館書店、1978。
- 尾関周二『言語と人間』、東京：大月書店、1983。
- 加賀野井秀一・酒井邦嘉、橋爪大三郎『新しい教科書 3 ことば』、東京：プチグパブリッシング、2006。
- 亀井孝、川野六郎、千野栄一『言語学大辞典第 6 巻術語編』、東京：三省堂、2003。
- 川本茂雄、田島節夫、坂本百大、川野洋、磯谷孝編『言語学から記号論 講座・記号論 1 』、東京：勁草書房、1982。
- 北原保雄監修、荻野綱男編集『朝倉日本語講座 9 言語行動』、東京：朝倉書店、2003。
- 窪田行則『視点と言語行動』、東京：くろしお出版、1997。
- 国語学会編『国語学大辞典』、東京：東京堂出版、1980。
- 国広哲弥「日本人の言語行動と非言語行動」『岩波講座日本語 2 言語生活』、東京：岩波書店、1977。

国立国語研究所『日本語教師用参考書Ⅰ言語行動と日本語教育』、東京：凡人社、1986。

小林英夫訳 1972『一般言語学講義 改版』ソシユール著 岩波書店。

佐藤方哉『月刊 言語 NO.16』「連載＝行動理論の招待（十）オペラント行動としての言語行動－行動理論の言語観・その一」、東京：大修館、1973。

佐藤方哉『月刊 言語 NO.17』「連載＝行動理論の招待（十一）媒介過程と言語行動－行動理論の言語観・その二」、東京：大修館、1973。

佐藤方哉「時枝誠記の言語過程説と B.F. Skinner の言語行動論」『帝京大学 心理学紀要 No.9』2005。

真田真治『社会言語学の展望』、東京：くろしお出版、2006。

渋谷勝己「言語行動の研究史」『朝倉日本語講座 9 言語行動』、東京：朝倉書店、2003。

ジョンソン、K. & ジョンソン、H. 著、岡秀夫訳『外国語教育学大辞典』、東京：大修館、1999。

杉戸清樹、真田真治、渋谷勝己、陣内正敬『社会言語学』、東京：おうふう、1992。
ダニエル・ロング、中井精一、宮治弘明編『応用社会言語学』、京都：世界思想者、2001。

デュボア・他編『ラールス言語学用語辞典』、東京：大修館書店、1980。

時枝誠記『国語学原論』、東京：岩波書店、1955。

中村明「日本語教育における言語行動の広がり」『日本語教育 49 号』、東京：日本語教育学会、1983。

中村明『テキスト日本語表現－現代を生きる表現行動のために－』、東京：明治書院、1999。

西尾実『言語生活の探究』、東京：岩波書店、1962。

西原鈴子「外国人とのコミュニケーション」『朝倉日本語講座 9 言語行動』、東

京：朝倉書店、2003。

日本語教育学会編 2005『新版日本語教育事典』大修館書店

ネウストプニー, J.V. 「言語行動のモデル」 「講座言語三巻 言語と行動」 南編
(1979) 所収, 東京：大修館書店、1979。

ネウストプニー, J.V. 「日本語教育と二重文化教育」 『日本語教育 49 号』、東京：
日本語教育学会、1983。

ネウストプニー, J.V. 「日本の言語行動の過去と未来」 『朝倉日本語講座 9 言語行
動』、東京：朝倉書店、2003。

野元菊雄「日本語教育と言語行動」 『日本語教育 49 号』、東京：日本語教育学会、
1983。

野元菊雄「言語行動学入門」 『日本語学 101 号特集・言語行動』、東京：明治書
院、1983。

野元菊雄「言語行動における言語体系」 『日本語教師用参考書 1 言語行動と日本語
教育』 東京：国立国語研究所、1985。

ハイムズ, D. 著 唐須教光訳 『ことばの民族誌 Foundation in Sociolinguistics—
An Ethnographic Approach-』 東京：紀伊国屋書店、1979。

橋本敬「動的言語観に基づいた単語間関係のダイナミクス」 『認知科学』 6 巻 1 号
東京：日本認知科学会、共立出版、1998。

波多野完治、野林正路編『新日本語講座 10 ことばと文化・社会』、東京：汐文社、
1975。

針生悦子編『朝倉心理学講座⑤言語心理学』、東京：朝倉書店、2006。

古田暁監修、石井敏、岡部朗一、久米昭元著『異文化コミュニケーション』、東
京：有斐閣、1987。

堀江薫「コミュニケーションにおける言語的・文化的要因—日韓対照言語学の観点
から—」 『日本語学 9 月臨時増刊号』、東京：明治書院、1998。

本名信行編、『異文化理解とコミュニケーション 1ーことばと文化』、東京：三修社、1994。

前田富祺「言語行動史」『日本語学 101 号特集・言語行動』、東京：明治書院、1983。

牧野成一「文化原理と言語行動」『日本語教育 49 号』、東京：日本語教育学会、1981。

松村明編『大辞林』、東京：三省堂、1988。

松浪有、池上嘉彦、今井邦彦『大修館英語学事典』、東京：大修館書店、1983。

南不二男編『講座言語第三巻 言語と行動』、東京：大修館書店、1979。

水谷修「言語行動としての教育実践―何を教えているかへの反省―」『日本語教育 49 号』、東京：日本語教育学会、1983。

山口明穂、秋本守英編『日本語文法大辞典』、東京：明治書院、2001。

ルイ＝ジャン・カルヴェ著 萩尾生訳『社会言語学』、東京：白水社、2001。

Schramm, W., ed., *The Process and Effects of Mass Communication*, Urbana, IL.: University of Illinois Press, 1954.

Skinner, B.F. *Verbal behavior*. New York, NY: Appleton-Century-Crofts. 1957。

中田達也「英語教育・外国語教育・第二言語習得に関する専門用語データベース」
<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~t-nakata/terms.htm> 2008。